

博士論文等内容の要旨

申請者氏名 藤原有里恵

論文題目 「抽象と風景のあいだ ―ターナーとロスコを手がかりに」

論文の目的

絵画はその時代の思想や生活と密接に繋がって変化してきた。時代は画家、そして人々の知らないうちに大きく様変わりするものである。画家はその絶えず変化する時代のなかでいかに思考し、そして描いてきたのか。本論文は、産業革命期のイギリスに生きた風景画家ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー（Joseph Mallord William Turner 1775-1851）の時代を基盤として、変化する時代の中で画家たちがどう絵画を描き続けたかを検証することによって今日に生きる我々画家の在り方を再考するとともに、自己の作品の展望について述べていきたい。

第一章 ターナーと絵画

近代以前のヨーロッパでは風景という画題はカトリックにおける宗教的テーマの背景に過ぎず、描かれる風景は「理想化された風景」であった。しかし18世紀のイギリスではカトリック色が濃くないオランダ絵画の影響を受けて、あるがままの自然を描いた風景画が流行の画題となっていた。我々が生きる現代において記録の媒体として普及している写真術というものもなかった時代、歴史画や肖像画のように、絵画が記録の役割をしていた時代において「何を描くか」、「何が描けるか」は職業画家の選択としては重要なことだったと考える。

そんな時代に生まれたターナーは1802年、26歳という史上最年少の年齢でロイヤル・アカデミーの正会員となり、風景画家としての地位を確固たるものとしていく。天才画家と呼ばれたターナーであったが、1830年代頃から晩年に近づくにつれてその写實的絵画は、抽象的形態と色彩による作品へ

と向かっていった。非形象と色彩の作品は未完成とされているが、その抽象絵画とも見える作品は当時の批評家から酷評され続けた。しかしターナーは己の表現の追求をし続けた。そしてそれらの作品は以降に誕生する印象派や今日の絵画に大きな影響を与えることになる。彼は晩年の抽象的作品を制作したことによって、描写力に優れた風景画家だけではない、後世に残る画家として評価されるようになったのだ。

第二章 時代で変容する絵画

ターナーの死後に発見された未完成の油彩画や夥しい量のスケッチは抽象的な色面構成が多く、当時の人々を困惑させた。しかし現代においてそれらはアメリカ抽象表現主義のマーク・ロスコ (Mark Rothko 1903-1970) の「画面を横に分断する構図」による作品を彷彿とさせるとして、ターナーの「抽象画家」としての先見性を見出そうとする研究者は多い。しかし、絵画が持つイリュージョンを打ち破ることで絵画の本質を描こうとしたのがロスコであり、ターナーはロスコと色面構成が似ていたとしても「風景」を描くことを最前提とした画家である。ターナーのスケッチは風景が持つ光や空気などを色彩に変化させるにはどうすれば良いかという実験を目的としたものであり、抽象画家としての片鱗を覗かせるものの、あくまで風景画家としての視点で描かれたものなのだ。

また、ロスコが色面による絵画を描くことができたのは、抽象概念や絵画の平面性、イリュージョンなどを意識する時代という土壌があつてのことである。抽象画の創始者と言われるワシリー・カンディンスキー (Wassily Kandinsky 1866-1944) による、偶然にも自分の作品の天地が違う向きで壁に立てかけられていたのを見て「抽象画」を発見した、という有名なエピソードが成立した時代も色彩の革命といわれるフォービズム、そして形態の革命といわれるキュビズムを経ての時代である。カンディンスキーが「抽象画」を発見するには十分な土壌がすでにできあがっていたのだ。比べてターナーの時代は色彩の絵画が認知されるだけの芸術的土壌が存在していなかったために当時は強く批判されたのである。

第三章 画家に託されていたもの

絵画の見方や価値は時代によって変容するものである。よって画家は時代に合わせた絵画の価値を考えなければならない。ターナーが写実主義の時代において色彩に傾倒した作品を描いた結果、批評家たちの理解を十分に得ることができなかったものの、時代が進むごとに、英国最高の画家と称される地位を得ることとなった。ターナーの、ともすれば抽象画ともとれる作品が描かれた晩年は、ヨーロッパは産業革命の只中にあり、写真術の発明により絵画の価値が危ぶまれる時代であった。特に再現性や写実性に力点をおいて描いていた画家たちは廃業に追い込まれる者も少なくなかったのである。写真術が発明される以前まで絵画が持っていた「記録性」や「写実性」という価値が写真に移行したことにより、画家たちは「絵画の価値」を再考しなければならなくなった。

写真術に反発する画家も多くいたなか、ターナーは時代の変化、そして新しいテクノロジーを柔軟に受け入れた画家であった。写真術に多大な興味を示し、売れない写真家と交流や応援などをしており、それはいずれ訪れることになる写真の時代を予見、肯定しているかのようである。社会から与えられていた画家の役割——「記録性」、「写実性」、そして「ジャーナリスト的な視点」を失ったとき、そして宗教的、寓話的テーマや記録性を伴った絵画から写実性を除いたうえで絵画に残されたものが絵画の特質であるだろう。そこに気付いたものだけが写真術が発明されようと新たな価値を絵画に見出し、絵画の本質に迫っていった。おそらくターナーもそのひとりであり、色彩とマチエールの実験をひたすらに繰り返した彼にとって写真術の登場はこれまでの画業を肯定させるものになったのではないだろうか。産業革命および写真術の発明により失業する画家たちがいるなか、変わらず絵画を描くことができた画家のひとりであったターナーは「絵画の新しさ」の追求ではなく「画家の役割」とは何かを追い求めて描いていた画家だったと言えるのではないだろうか。

第四章 自作品とロスコ、またはターナー

ターナー以降、印象派をはじめとする様々なイズムが誕生し、絵画における価値は写実性や再現性以外のところにも見出されることとなった。そしてロスコ以降、表現媒体はさらに多様化し、芸術と

いう概念の発展によって芸術は哲学的思考にまで到達したのである。

現代におけるアートシーンはさらに混沌としたものであるように思われる。現代において芸術を産業とするのなら少なくとも同時代性のもと描かなければならない。しかし、ひとつの芸術が終わるたびに新しい芸術は誕生してきたが、ゼロから誕生するまったくの新しさを孕んだ芸術は存在せず、すべて過去の一要素などを引き継いできた。私自身の作品は非常にターナーの色彩に通じるものがあるが、それは現代に生きながらも過去のイズムのうちで描いているとも言える。しかし時代は繰り返されるものであり、現代の多種多様な絵画が存在するアートシーンも、たとえば10年後、どうなっているかは誰にも想像できないのである。

ターナーが自分の描きたい絵画の追求をやめなかった結果、その絵画が現代においても燦然と輝いているように、後世のことは誰にも予想できない。誰も見たことがないような絵画が批判される時代がある一方、「新しさ」に価値をおいたものが求められる時代もある。それは後世に自分の作品がどう評価されるか分からない、また時代がどう流れるか分からない状況下で画家は己ができる最上級の仕事をしなければならないということを示している。

ターナーの時代において「絵画の価値」が問い直されたように、変化する時代のなかで画家たちは繰り返し絵画の価値、そして役割を問うてきた。同時代性を意識しながら、しかし流行を追うことよりもその時代における画家の役割、そして絵画の役割を意識するのだ。現代において絵画の役割が社会的にどうあるかの実証は難しい。しかし絵画の隆盛を望む一人の画家として、ターナーが批評家たちから酷評されながら、逆にそんな批評家たちを批判し、求められなくても自分が描きたいものを描いたように、どう変わるか分からない現代においてそのように描かれるべきだと私には思われるのだ。

おわりに

ターナーの生きた産業革命の時代は人類にとって大きな分岐点となった。移り変わる時代のなかで変わらず己の絵を描き続けることができたターナーの精神というものは、私にとって励みとなるものである。一方で、時代の流れを感じ取り、「絵画の役割」を意識したその先見の明の必要性は、混沌と

した現代に生きる私も培わなければならないものだと強く感じている。様々な芸術は前時代のものを引き継いで発展してきたのであり、前時代に立ち戻るだけでは新時代の絵画にはなり得ないからである。先人たちの「芸術とはなんであるか」という議論を推し進めるかたちで現代の芸術に関わっていかなければならないのである。

批評家たちから酷評を受け続けたターナーであったが、しかし彼は死してなおアートシーンを賑わし、批評家たちを困惑させ続けた。そしてそれは今なお続いている。時代の移り変わりに合わせて絵画も変容せざるを得なく、そう述べると画家たちはまるで時代に振り回される存在のようである。しかし実際、時代を動かすことができるのは画家ひとりひとりが描いた絵画の声に違いないのだ。